

## 狩猟採集民オロチョンの集落研究に向けて

遠 藤 匡 俊\*・張 政\*\*

(2003 年 10 月 31 日受理)

### (1) 目的

本稿の目的は、中国北東部の大興安嶺・小興安嶺周辺地域において狩猟採集生活をしていたオロチョンの集落研究の意義を示すことである。オロチョンは、ノロ、ハンダハンなどの動物を仕留めて主な食糧にし、交易のためにリス、アカシカなどを捕獲していた狩猟採集民である。移動用にウマ(馬)やトナカイ(馴鹿)を用いるために、遊牧民としての性格をも持ち合わせていた。もともとは1つのオロチョンであったものが、森林ステップと森林ツンドラに棲み分けて馬(ウマ)オロチョンと馴鹿(トナカイ)オロチョンに分化したものと考えられている(今西・伴, 1948a, 1948b)。このように、狩猟採集から牧畜へという人類史上の生業形態の歴史の変遷過程を考察する上で、オロチョンは貴重な研究対象である。「オロチョン」という民族名には、「山の嶺に住む人」あるいは「鹿を飼い慣らす技術を使う人」という意味がある。オロチョンは自らの民族文字をもたなかったが、清代には自らの民族語のほかに満州語・満州文字を使う人もあり、中華民国以後とくに1953年に定住を開始してからは漢語・漢字を用いる人が多くなり、1990年代初めにはオロチョンの主要な生業は林業となっていた(王・関, 1999)。近年は満州国時代(1932-1945)の様々な資料が公開されるようになり、オロチョン研究の進展が期待されている(佐々木, 2002)。

狩猟採集活動を行っていたオロチョンという一少数民族の集落に関する研究が重要であると判断される理由として、①世界の狩猟採集民と同様に、オロチョンの集落を構成する家の組み合わせが固定せずに頻繁に変化していた可能性があること、②1列横隊というオロチョンの集落形態が信仰と密接に結びついていた可能性があること、の2点があげられる。

### (2) オロチョンの集落分布

オロチョンの典型的な季節的移動は、夏は河川の上流へ移動し、冬は下流へ移動しながら1年間に楕円を描いて谷を一周するというものであった(赤松, 1941)。河川の両側に広がる谷間がオロチョンにとっての狩猟場であり、季節的移動は牧馬のためでもあったという。このように狩猟採集活動を行いながら移動生活をしていたオロチョンの集落分布を現地調査によって把握することは、非常に困難であったと考えられる。そのようななかで、1938年10月現在のオロチョンの集落分布が、治安部参謀司調査課(1939a)によって作製されている(図1)。図1にお

\* 岩手大学教育学部地理学研究室

\*\* 中国黒龍江省民族博物館/岩手大学大学院・教育学研究科・院生

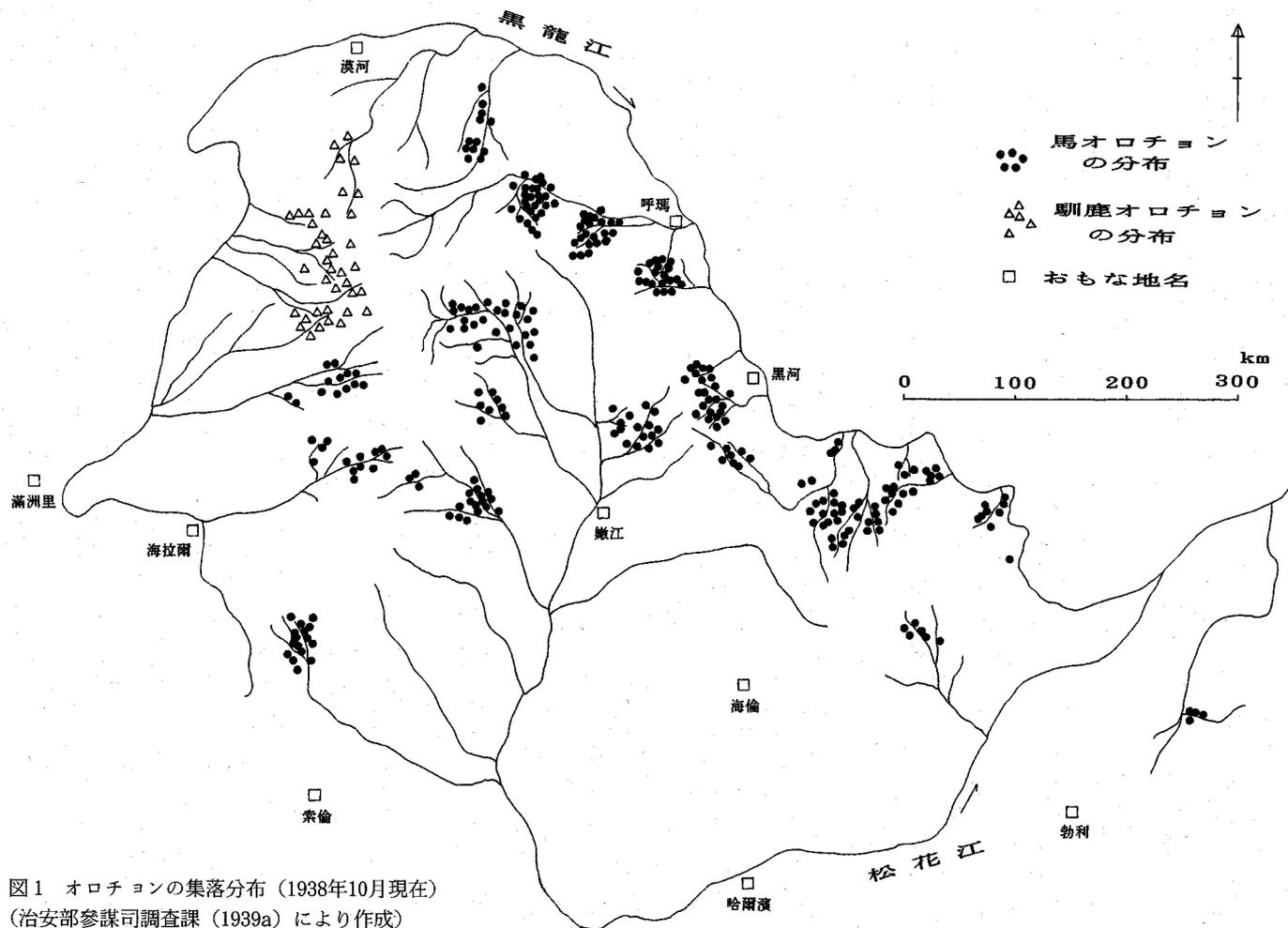


図1 オロチヨンの集落分布 (1938年10月現在)  
 (治安部参謀司調査課 (1939a) により作成)

いて、●印と△印が個々のオロチョンの集落を示すものと考えられる。この『鄂倫春族分布圖』(治安部參謀司調査課, 1939a)は、日本人によるオロチョンに関する民族学的報告の1例として紹介されている(佐々木, 1994)が、地理学分野からみても重要な調査であった。1938年当時のオロチョンの集落は、ほぼ山岳地域の河川上流域に分布していたことがわかる。「オロチョン」という民族名には、「山の嶺に住む人」という意味もある(王・関, 1999)ことは、とくに『馴鹿オロチョン分布圖』(治安部參謀司調査課, 1939b)によって、馴鹿(トナカイ)オロチョンの集落が河川からは少し離れた山の嶺付近にも分布していたことから理解できる。

### (3) オロチョンの集落形態

1900~1940年の大興安嶺・小興安嶺周辺地域において狩猟採集生活をしてきたオロチョンの集落に関する研究は、これまでおもに中国や日本の研究者によって成されてきた。オロチョンのテント(家屋)は、ほぼ円錐形をしており(図2)、その内部は一部屋となっていた(図3)。

1934~1936年頃に調査を行った吉岡義人の記録によれば、「オロチョンは多く河川に臨む山腹、又は丘陵に、少きは一、二戸、多きも十戸位のテントを構え、テントは一、二間の間隔をおいて並列するを常とする。向は冬は南向、夏は北向である。」とある(秋葉, 1936a)。このように、オロチョンの集落は、数戸のテントがそれぞれ出入口を横に並べた、いわば1列横隊という集落形態であった。秋(1978)によっても、かつて狩猟採集生活をしてきたオロチョンの集落形態は、ほとんど直線形(一字形)もしくは弧形という事例であったことが示されている。内モンゴル自治区の鄂倫春自治旗では1954年からオロチョンは次第に移動生活から定住生活を営むようになった。新しい定住的な集落の形成にあたって、オロチョンの老人は直線形の集落形態を望んだが、1列に配列すると1村落の長さは1キロメートル以上にもなってしまうために、直線形の集落形態は実現せず、鄂倫春自治旗の人民代表大会の決定により複数の直線形からなる街路型の集落形態となった(秋, 1978)。

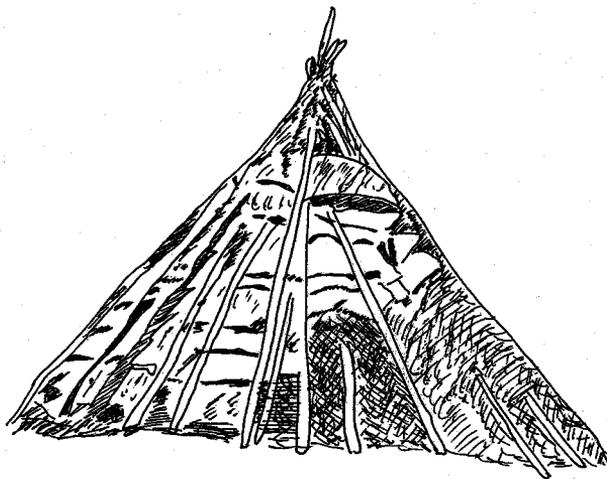


図2: オロチョンのテント(家屋)の外観  
(泉(1937)により作成)

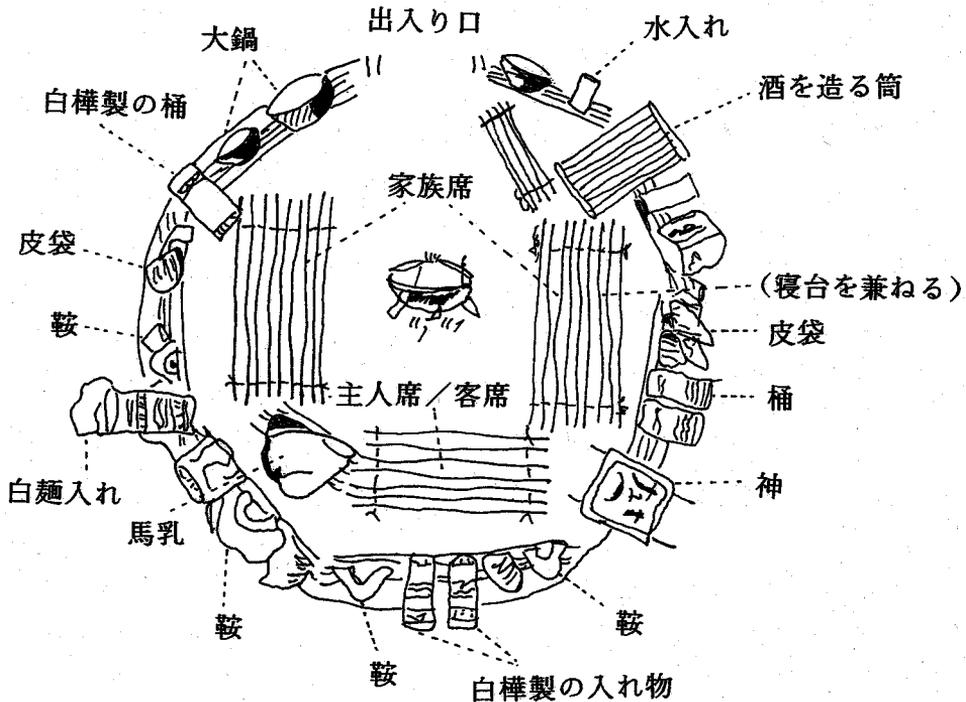


図3：オロチョンのテント（家屋）の内部  
 （治安部参謀司調査課（1939a）により作成）

狩猟採集活動を行い移動生活をしていた頃のオロチョンの集落では、テントの外側の背後には様々な神を象徴するものが設置されており、この神像に女性は近づくことができなかった（秋，1978）。つまり、テントの背後に女性が近づくことがないようにするためには、集落形態が直線形もしくは弧形であるというだけでは不十分である。例えば、複数のテントが1列縦隊に配列した場合には、テントの出入り口付近に居る女性は、隣のテントの背後に位置することになり、テント間の距離を十分に確保しないかぎりタブー（taboo）に触れることになると考えられる。出入り口を同じ方向に設けた1列横隊に配列した場合には、タブーに触れる可能性はより低くなると考えられる。秋ほか（1984）によれば、神像はテントの外側背後に配置される場合とテントの内側奥に配置される場合があった。図3は、神像がテントの内側奥に配置された事例と考えられる。図3のように、神像がテントの内側奥に配置された場合にも、女性は外部からテント背後に近づくことができなかったのかどうかについては明確ではない。とはいえ、神像が置かれる場所に関わらずに、オロチョンの信仰がテントの配置と関わっていた可能性がある。集落形態が直線形もしくは弧形という場合、1列横隊は有り得ても、1列縦隊はなかったと考えられる（図4）。秋（1978）によれば、複数のテントが1列縦隊に配列することはできなかったという。このように、秋（1978）によって狩猟採集生活をしていたオロチョンの集落形態の詳細が示され、集落形態と信仰とが密接に結び付いていた可能性が示された。

日本の地理学における集落形態に関する研究は、とくに村落を対象として数多くなされてきたが、世界の様々な自然環境で生きてきた人々が暮らす多様な集落形態を、その人々の生活と結びついて紹介されれば、日本の高校生にはより関心をもって受け入れられる可能性がある

〈 a 〉 一列横隊



〈 b 〉 一列縦隊

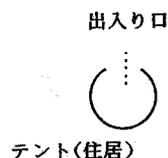


図4：オロチョンの集落形態のモデル

思われる。日本における散村と集村（路村，列村，街村など）という事例のみではなく，ムブティ・ピグミー（Mbuti Pygmie）やシャイアン（Chyenne）の円村の事例（フレイザー，1984）などのように，広く世界に事例を求めて紹介されることが望ましい。1列横隊という集落形態が信仰と密接に結びついていたオロチョンの事例は，その一例になると考えられる。

(4) オロチョンの集落形態の具体像

オロチョンの集落形態がどの程度に直線的であったのか，また各家屋の出入り口はどの程度に同じ方向に向けられていたものだったのか，という集落形態のより詳細な具体像については必ずしも明確ではなかった。これは集落形態については，文字による説明が中心となり，写真，図，スケッチなどによって具体的な集落形態の姿を示すことがあまりなかったためと考えられる。狩猟採集生活をしてきたオロチョンの集落形態の具体像を知る上で，秋葉（1936b, 1941）による大興安嶺北東部の畢拉河流域における1935年の集落形態の調査報告例が参考になる（図5）。決してきれいな一字形（直線）もしくは弧形とはいえないが，ほぼ1列に13戸のテント（家屋）が弧状に配列している。秋葉（1936b, 1941）によれば，1～13の番号で13戸の各テントを示すとき，1, 2, 3の3戸の居住者はお互いに親族である。同様に，7, 8の2戸，9, 10の2戸の居住者もそれぞれ親族である。5, 6, 7, 8の4戸の居住者間には親交があり，同様に11, 12, 13の3戸の居住者間にも親交があり，4の1戸のみが孤立している。このように13戸のテントは，親族関係と近隣関係から5つの小集団に分けられるという。14番目の建物は工作事務所であり，この集落は満州国の政策によって，大興安嶺の各地から集められた13戸の混成集団であると，秋葉（1936b, 1941）によって推測された。「ベラ河上流の大濕原を遥かに臨みつゝ草原と清流とに取りまかれた白樺林の丘上にあつて，その直ぐ近くに各地から集まつた統

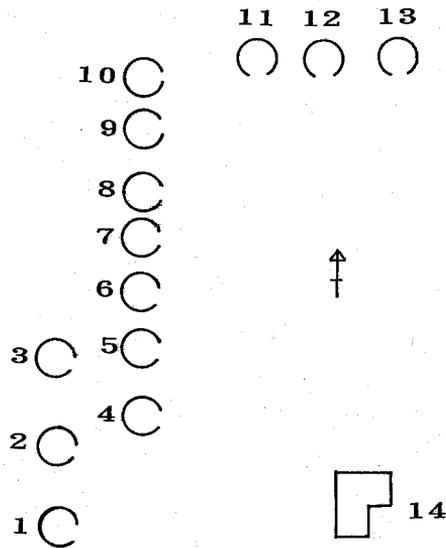


図5：オロチョンの集落形態（1935年）  
（秋葉（1936b）により作成）

制下のオロチョンテント十三箇が鍵の手に立ち並び、……本格的オロチョン工作が始まった。」（秋葉，1936c）とある13戸のテントが、この集落のことであると考えられる。

13戸のテントのそれぞれの前住地は、大興安嶺の8カ所にのぼる。各前住地からは、1～3戸のテントがそれぞれ移動してきて集落が形成されたことになる。このように前住地を異にするテントが集合することで形成された新しい集落は、世界の狩猟採集社会で確認されつつある集団の空間的流動性と共通する現象である。集団の空間的流動性とは、集団の構成員が短期間のうちに頻繁に入れ替わることであり、これまでサン（San）、ムブティ・ピグミー（Mbuti Pygmie）、ハッザ（Hadza）、ヘヤー・インディアン（Hare Indian）、イヌイト（Inuit）、アイヌ（Ainu）などの狩猟採集社会で確認されてきている（Turnbull, 1965, 1968; Damas, 1968; Lee and DeVore 1968; Woodburn 1968; Savishinsky, 1971; Lee, 1979; 須江, 1964; 田中, 1971; 原, 1977a, 1977b; Tanaka, 1978, 1980; 米山, 1988; 遠藤, 1985, 1997; 原, 1989; Endo, 1995）。このように世界の狩猟採集社会で確認されてきた集団の空間的流動性が生じる原因については、狩猟採集社会本来の特徴であるのか、それとも近年の文化変容の結果であるのかという問題は、依然として不明のままである（Lee and DeVore, 1968; 遠藤, 1997）。

1935年の大興安嶺北東部の畢拉河流域におけるオロチョン集落の場合、秋葉（1936, 1941）のいうように異民族による強制力が働いた結果であったのだろうか。この集落には工作事務所が設置されていたことから、オロチョンの人々は日本人の影響をかなり受けていたと考えられるが、大興安嶺の8カ所から13戸が移動してきて1つの集落が形成されたという集団の流動性自体は、オロチョンの人々の自律的な生活の結果である可能性も残されていると考えられる。その理由は、場所と年次は異なるものの、オロチョンの人々の自律的な集団の空間的流動性と思われる事例が報告されているためである。

## (5) オロチョンの自律的な集団の空間的流動性

秋(1978)によれば、定住化する以前のオロチョン社会においては集落を構成する家は、引越すことによってその集落から出ることが自由であり、同様に他集落へ入ることも自由であった。このような家の集落間移動は、オロチョンの自律的な行為であったことになる。つまり、秋(1978)の報告は、オロチョン社会においては自律的な家の集落間移動によって、集落の構成が流動的に変化していた可能性があることを示唆している。

森下(1952)は、1940~1942年間の大興安嶺における馴鹿(トナカイ)オロチョン一家の移動を聞き取り調査している(表1)。1941年には春夏秋冬という季節に応じて4カ所の河川流域を移動していた。移動距離は直線距離でそれぞれ10~20キロメートルほどであり、1カ所での滞在期間はそれぞれ2~3カ月間である。この移動は2~4家族連れで行い、その家族の組み合わせは変化していた。このような移動を経て、2~3カ月の間にはどのような家族の組み合わせで集落が形成されていたのかについては明記されていない。しかし、移動時における家族の組み合わせが変化していたという事実は、集落の構成も流動的に変化していたことを示唆している。

さらに、秋ほか(1984)は、1950年代中期~1960年代初期にオロチョンの古老から聞き取り調査を実施して、1900~1940年頃の大興安嶺・小興安嶺地域におけるオロチョンの集落に関する詳細な復元を行っている。ここでは、集落を構成する家の組み合わせについての具体的な分析は行われていない。しかし、この調査報告書に記された集落名、居住者名などを当時の地名が記された地図などを手掛かりに、集落ごとの居住者を復元することで、集落の構成が流動的に変化していたことを示す可能性がある。また、この調査報告書に記された居住者相互の親族関係を復元し、移動経路や移動先との関連で分析することで、集団の流動性が生じるメカニズムの一端を示すことが可能であると考えられる。

表1 トナカイ・オロチョンの一家族の移動と同行者

季節	場所	直線距離	滞在日数	同行した家族
1940-41年 冬	大ジモイチ川	15km	3カ月	A, B
1941年 春	カラオク川	10km	2カ月	A, B
1941年 夏	大チマリ川	15km	3カ月	A, B, C
1941年 秋	アルバジハ川上流	15km	2カ月	C, D
1941年 秋-冬	チンリンジャンシ川	20km	2カ月	D
1941-42年 冬-春	ジモイチ川	10km	6カ月	D
1942年 春-夏	オルスクナイ川	30km	1カ月	D
1942年 夏	チーリンジ			

(森下(1952)により作成)

## (6) 大興安嶺・小興安嶺周辺地域とオロチョン

満州国というと、日本の中国に対する十五年戦争の発端となる満州事変によって日本が作りあげた傀儡国家とされる（江口，1988，1990a，1990b；王・関，1999）。満州国，満州事変は、日本人が中国とくに中国北東部地域を理解する上で、避けては通れない歴史的事項である。満州国という傀儡国家が樹立されたこと，清朝末期から満州国時代にかけてオロチョン社会にアヘン（阿片）がもたらされたことは，歴史的事実として直視される必要がある（泉，1937；今西・伴，1948b；秋ほか，1984；江口，1988；朴，1994；王・関，1999）。しかし，教育という観点からとらえるとき，満州という地域は，日中戦争やアヘンという歴史的事実のみではなく，狩猟採集民オロチョンという少数民族を主題に据えて把握することも可能である。さらに，これまで中国人や日本人などによって成されてきた研究成果を総合的に把握することで知ることができるオロチョンの生活を，高校地理教育の場などで紹介することは有意義である。大興安嶺・小興安嶺周辺地域は，オロチョンという狩猟採集民を対象とすることによって，いわば異文化理解教育，地域（国際）理解教育の場ともなり得ると考えられる。

キーワード：オロチョン，集落，狩猟採集民，集団の流動性

Key words: Orochon, settlement, hunter-gatherer, fluid residential grouping

本研究では，平成15年度岩手大学活性化経費（申請区分：展開・戦略的研究，研究課題：狩猟採集民の文化に関する国際共同研究に向けて）を用いた。

小稿を，故 岩手大学名誉教授 駒井 健先生に捧げます。

## 文 献

- 赤松智城（1941）：総説．赤松智城・秋葉 隆：『満蒙の民族と宗教』．内外出版，1-53頁．
- 秋葉 隆（1936a）：トケブ吉岡君オロチョン踏査記（三）—オロチョン民俗断篇一．満蒙，17(9)，109-119頁．
- 秋葉 隆（1936b）：大興安嶺東北部オロチョン族踏査報告（一）．京城帝国大学文学会論叢，4，1-48頁．
- 秋葉 隆（1936c）：オロチョン工作記．東洋，39(10)，107-111頁．
- 秋葉 隆（1941）：オロチョン族．赤松智城・秋葉 隆：『満蒙の民族と宗教』．内外出版，55-157頁．
- 泉 靖一（1937）：大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告．民族学研究，3(1)，39-106頁．
- 今西錦司・伴 豊（1948a）：大興安嶺におけるオロチョンの生態（一）．民族学研究，13(1)，21-39頁．
- 今西錦司・伴 豊（1948b）：大興安嶺におけるオロチョンの生態（二）．民族学研究，13(2)，42-61頁．
- 江口圭一（1988）：『日中アヘン戦争』．岩波書店，209頁．

- 江口圭一 (1990a): 満州国 まんしゅうこく. 京大日本史辞典編纂会編: 『新編日本史辞典』, 東京創元社, 933-934 頁.
- 江口圭一 (1990b): 満州事変 まんしゅうじへん. 京大日本史辞典編纂会編: 『新編日本史辞典』, 東京創元社, 934-935 頁.
- 遠藤匡俊 (1985): アイヌの移動と居住集団—江戸末期の東蝦夷地を例に一. 地理学評論, 58A, 771-788 頁.
- 遠藤匡俊 (1987): 江戸末期の三石アイヌにおける流動的集団の形成メカニズム. 地理学評論, 60A, 287-300 頁.
- 遠藤匡俊 (1997): 『アイヌと狩猟採集社会—集団の流動性に関する地理学的研究—』. 大明堂, 203 頁.
- 佐々木亨 (1994): 日本人によるオロチョンに関する民族学的報告の比較研究—「鄂倫春の實相」を中心に—. 北海道立北方民族博物館研究紀要, 3, 93-137 頁.
- 佐々木亨 (2002): 満州国時代における観光資源. 展示資料としてのオロチョン. 煎本孝編: 『東北アジア諸民族の文化動態』. 北海道大学図書刊行会, 163-213 頁.
- 須江ひろ子 (1964): Hare 族の社会構造—変貌する社会の一断面—. 民族学研究, 28, 181-196 頁.
- 田中二郎 (1971): 『ブッシュマン』. 思索社, 144 頁.
- 治安部参謀司調査課 (1939a): 『満州ニ於ケル鄂倫春族ノ研究 第一篇』. 治安部参謀司調査課, 101 頁+34 頁+付図 (2 葉).
- 治安部参謀司調査課 (1939b): 『満州に於ける鄂倫春族の研究 第四篇 馴鹿鄂倫春族』. 治安部参謀司調査課, 40 頁+21 頁+12 頁.
- 原ひろ子 (1989): 『ヘヤー・インディアンとその世界』. 平凡社, 493 頁.
- 原子令三 (1977a): ムブティ・ピグミーの生態人類学的研究—とくにその狩猟を中心に—. 伊谷純一郎・原子令三編: 『人類の自然誌』. 雄山閣, 29-95 頁.
- 原子令三 (1977b): 狩猟. 祖父江孝男・米山俊直・野口武徳編: 『文化人類学事典』. ぎょうせい, 13-19 頁.
- 森下正明 (1952): トナカイとともに. 今西錦司編: 『大興安嶺探検—1942 年探検隊報告—』. 毎日新聞社, 300-307 頁.
- 米山俊直 (1988): バンド band. 下中直也編: 『世界大百科事典』, 23, 平凡社, 574 頁.
- 秋浦 (1978): 『鄂倫春社会的発展』. 上海人民出版社, 212 頁.
- 秋浦・布林・趙復興・敖楽綺・莫金臣 (1984): 『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊・鄂倫春族社会歴史調査』. 内蒙古人民出版社, 363 頁.
- 王宏剛・関小雲 著, 黄強・高柳信夫・荒山美恵子・大間知利尚・額田基嗣 訳, 萩原秀三郎 監訳 (1999): 『オロチョン族のシャーマン』. 第一書房, 364 頁.
- 朴櫃 著, 許東燦 訳 (1994): 『日本の中国侵略とアヘン』. 第一書房, 302 頁.
- フレイザー, ダグラス 著・渡辺洋子 訳 (1984): 『未開社会の集落』. 井上書院, 113 頁.
- Damas, D. (1968): The diversity of Eskimo societies. Lee, R. B. and DeVore, I. eds. *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 111-117.
- Endo, M. (1995): The mobility of resident members of the Ainu in Hokkaido, Japan, in the mid-nineteenth century. *The Science Reports of the Tohoku University (Tohoku daigaku rika houkoku)*, 7th series (Geography), 45(2), pp. 75-102.
- Lee, R. B. (1979): *The !Kung San: Men, women, and work in a foraging society*. Cambridge University Press, Cambridge, 526p.

- Lee, R. B. and DeVore, I. (1968) : *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, 415p.
- Savishinsky, J. S. (1971) : Mobility as an aspect of stress in an arctic community. *American anthropologist*, 73, pp. 604-618.
- Tanaka, J. (1978) : A study of the comparative ecology of African gatherer-hunter with special reference to San (Bushman-speaking people) and Pygmies. *Senri Ethnological Studies*, 1, pp. 189-212.
- Tanaka, J. (1980) : *The San, hunter-gatherers of the Kalahari*. University of Tokyo Press, Tokyo, 232p.
- Turnbull, C. (1965) : The Mbuti Pygmies : An ethnographic survey. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History*, 50(3), pp. 139-282.
- Turnbull, C. (1968) : The importance of flux in two hunting societies. Lee, R. B. and DeVore, I. eds. *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 132-137.
- Woodburn, J. (1968) : Stability and flexibility in Hadza residential groupings. Lee, R. B. and DeVore, I. eds. *Man the Hunter*. Aldine Publishing Company, Chicago, pp. 103-110.